

# ラブパニックは隣から

*Shu & Teruto*

---

有涼汐

*Seki Uryō*



エタニティ文庫

## 目次

ラブパニックは隣から

5

思えば思われる

277

書き下ろし番外編

惚れた病に薬なし

313

ラブパニックは隣から

第一章 出梅しゅつばい

恋愛は苦手。

仕事のように必死に頑張ったとしても、わかりやすく目に見える成果が出ない。心の問題なのだから、当たり前だ。

だから恋愛を遠ざけて、仕事を必死にこなしてきた戸松舟とまじゆうは、二十八歳になった今、恋人がいなかった。

その事実を改めて思い出し、誰もいないエレベーターでため息をつく。肩のラインで切り揃えたこげ茶色の髪を指でくるくると巻いた。

今日の朝礼で、二つ年下の後輩が寿退社じゆたいすることになったと発表された。彼女の相手は、舟がお世話になった上司だ。年の差は十歳近いはず。

昨今では年の差婚も多いのでさほど驚くことではないが、堅物で仕事の鬼と称されていた上司が結婚するという衝撃は、なかなかのものだった。

彼は自分と同類だと感じていただけに、勝手に取り残された気分になる。

「まだ大丈夫」と思っていたが、まったくそんなことはないのだ。

そのことに今さら気づいて、青ざめている。

このままだと婚期を逃のがす。

それは親族や友人、近所のおばさまなど、様々な人から言われ続けた言葉だ。

もう二十八歳、あと二年もすれば舟は三十歳となる。時間がない。

誰かいい人と知り合って、付き合って、結婚する。

そこに辿りつくには最低三年は必要だろう。

何せ今現在、候補者にすら出会っていない。

相手のことを何も知らないところから始めなければいけないのだ。この人でいいのか見極めるのに時間がかかる。

幸せな結婚をしたいなら、いい加減、何か行動しなければならぬ。

カツンツとパンプスを鳴らしながら、舟はエレベーターを降りた。そのまま会社の廊下を真っ直ぐ歩く。

時計を見ると、時刻は午後の三時過ぎだった。

仕事中にこんなことを考えてどうすると思いつつも、舟の脳内で複数の自分が会議を始める。

『このまま行くと、未来は孤独死であると思われれます』

『それを回避するためには、仕事にかまけて怠<sup>おこ</sup>っている美容院やネイルにきちんと通うべきではないでしょうか?』

『いや、この場合必要なのは、友人に頼んでの合コンだ。もしくは婚活パーティーに限る。』

『待って! 友人に頼むのも、婚活するのも、ワタシにはハードルが高すぎない?』

あーでもない、こーでもない、とうるさい脳内の自分たちを消すように、舟はばたばたと頭の上を手で払った。

脳内の自分が心配していたのは、舟のプライドだ。

自分から合コンを頼み婚活をするなど、男が欲しいと周囲に宣言しているように思える。

別段、そう思われても気にすることではないのだけれど、舟にはそれが見るのしいと感じてしまう。

自分でもどうしてこんなに面倒くさい性格なのかと問いただいたいだいが、気になるものは気になる。

そんなこともあるせいかな、最近肝心の仕事にもあまり身が入らなくなっていた。

疲れているのかな。そうじゃなければ、上司の結婚を羨<sup>うらや</sup>ましがって、脳内会議に発展するわけがない。

今日は帰りにスーパーで好きな銘柄のお酒を買って、好みのおつまみとデザートと共に映画鑑賞でもしよう。

そうすれば多少なりと気持ちが収まるし、楽になる。

そうしている内に、舟は自分の部署の前まで移動していた。

「おーい、戸松」

不意に後ろから声が聞こえる。

その声の主は、舟にとっては会いたくはない人物だ。

聞こえなかったふりをしようかとも思ったが、すでに立ち止まってしまった。

舟は諦めて振り返る。

「何? 西平」

「そんな嫌そうな顔すんなよー」

「嫌そうな顔だつてわかるなら、声かけなきやいいじゃないの」

舟に声をかけてきたのは、同期の西平瑛人<sup>ていびと</sup>だった。彼は舟と同じ二十八歳で、舟とは真逆のタイプの人間だ。

社内規則ギリギリの明るい髪色に、癖毛なのかわざわざそうセットしているのか、遊びのある髪型をしている。さすがにピアスはしていないが、耳に空いた穴は塞<sup>ふさ</sup>がりきつていない。

西平を見た人間は誰しも「チャライ」という印象を持つだろう。見た目だけでなく、言動もどこか軽い。

ただ見た目通り仕事も適当なのかというのと、それは違う。

彼は営業部で常にトップクラスの成績を保持し同期の中では出世頭。次の人事異動で昇進するのではないかと噂されていた。

自分の言動には常に注意しているし、周りのこともよく見ている。

舟から見た西平は「世渡り上手」だ。

それが気に入らない。

「……それで？」

「これ。お前のだろ？」

西平がべらりと一枚の紙を差し出してくる。

舟は首を小さくかき上げて、その紙を見た。瞬間、西平からそれをパツと奪い取る。

「な、なんでこれ！」

「いや、落ちてたんだよ。俺は結構好きだよ、それ」

「何それ……嫌味？」

小さな声で呟き、舟は唇をへの字にしながら紙を握り潰した。

西平が拾ってくれたのは、舟が先日提出してボツをくらった企画書の一部だ。

なぜ彼がそれを舟のだと判断したのかはわからないが、「好きだ」などと感想を言うくらいだから、中身を読んだのだろう。

正直、他人に見られたくはなかった。

「戸松が廊下通った後にこれが落ちてて。きつと戸松のだったって思ったんだよ。すぐに返したかったんだけど、外に出てっちゃったから今まで渡しそびれてさー」

「それなら机の上に置いておけばいいじゃない。わざわざ渡しにこなくたってよかったわよ。……でも、……ありがとう」

舟はどうしても西平に対してだけ、尖った態度を取ってしまっていた。

社会人なのだから、好き嫌いで態度を変えるのは問題だ。それはわかっているが、どうもうまく対応できない。

これが西平でなければ、「わー、ありがとう！ 助かったー」くらい言えるのに。

「どういたしまして。あ、俺からちょっとアドバイスしてもいい？ その企画はいいんだけど、書き方がなんていうか……ありきたりとも取れちゃうかなーって。売り込むのには、もう一工夫が欲しいところかも」

「んなっ！」

「じゃ、頑張れよー」

舟は顔を赤くしながら、わなわなと身体を震わせた。

そんなことは言われなくてもわかっている。ぐしゃぐしゃの紙をさらに強く握りしめ、下唇を強く噛んだ。

確かに舟が提案する企画は硬い。

人の興味を引きつける、遊びや夢がないのだ。

彼女が勤めているのは文房具メーカーで、大手というわけではないが機能性とデザイン性が絶妙な商品が多い、と若い世代から人気のある会社だ。

舟も高校生の時に父親から誕生日プレゼントに貰ったもらこの会社のペンが気に入っていた。

シンプルなデザインで書きやすく、何年使っていても流行遅れになることがない。それを現在もお守りとして持ち歩くほどだ。

思えば、そのペンがこの会社に入社した動機の一つである。

入社してすぐ、舟は志望通り営業部に配属された。

右も左もわからないながら必死に営業をこなし、三年もたつ頃には信頼してくれる問屋の人たちもできたし、トップとまではいかないもののそこそこの成績を出せるくらいにはなった。

そんな時異動してきたのが、同期の西平だった。

正直、入社したばかりのころから彼のこと苦手——嫌だったのかどうかは覚えて

いない。何か彼を嫌いになるきっかけがあった気もするのだが、なぜか記憶が曖昧あまいで思い出せないのだ。

けれど、異動してきた時に苦手な人が来たな、と思ったのは覚えている。

西平は営業部に配属後、たった数ヶ月で舟の成績を軽々と抜き、トップになった。

悔しくて西平に負けないように頑張ったものの、結果は散々。

舟がアプローチして粘った末に断られた取引先からも、彼は簡単に契約を取ってきたしかも、「相手方が面白い人で、俺はただ話してただけなんですけどねー」などのたまう。

舟は営業部で過ごした自分の三年間を踏みにじられた気分になったものだ。

彼に舟を怒らせる気がないのはわかっているけど、腹が立った。

誠実に丁寧な、心をかけてきた舟にとっては、西平の営業態度は許せない。

いや、許せないというよりは、妬たましい、というのが正しいのかもしれない。

どう足掻いても舟は西平のようにはなれない。それが悔しいし、自分にはないものを持つている彼を見るのはとてつもなく嫌だ。

幸いその一年後、舟の異動が決まった。

それが現在所属している企画部だ。

企画の仕事も楽しい。自分が考えたものが実際に形になっていくのを見ることで、た

まらないほどのやり甲斐と幸せを感じる。

舟は西平に負けて落ち込んでいた心を癒やされ、ますます仕事に打ち込んだ。だが、ここ最近では企画が通らず焦っている。

今回提出した企画は、飽きの来ない普遍的な機能美に拘ったのだが、シンプルすぎて特色がないように見えてしまったらしい。

デザイナーに派手さがなく、これだったら量販されている安いものでもいいと思われそうだが、と会議で落とされた。

そこへ、西平からの一言。

彼からすればよかれと思つての発言だったのかもしれないが、いかんせんタイミングが悪かった。いや、最上級に機嫌がいい時でも、素直にアドバイスを感謝できたかはわからない。

西平は舟のコンプレックスを刺激する存在だから。

「ほんつと、可愛くない性格」

思わず心の声が音となって漏れた。

西平が嫌いだとか苦手だとか、わだかまりがあるにしても、あの反応はよくない。女性としても社会人としても駄目だ。

これだから、恋ができないのかもしれない。

それに、自分の感情をコントロールできないようでは、万が一、素敵な人が現れて恋人同士になつたところで、喧嘩して終わってしまう可能性が高いだろう。

深海くらい深く落ちていた感情が、より落ちた。これ以上はないという場所まで。

舟はやるせない気持ちになりながら、自分のデスクに戻った。

「戸松さん、お帰りなさい。これ、部長が目を通しておいてほしいって」

「ありがとう」

今年入社して企画部に配属された二十三歳の足立奈々が、舟に書類を差し出した。舟はそれを受け取り、席に戻っていく足立の後ろ姿を見つめる。

ふと、男性にモテるのは彼女のようなタイプなのかなと思う。

足立は柔らかくふわふわとした雰囲気、誰にでも愛想がよい。

仕事は速いが、見直しをしないのかちよつとした間違いが多いので、要領が悪いと思われている。もっとも、そこが可愛いと男性社員には人気だ。

舟は彼女の教育係ではないので、特になんの感想も持っていない。仕事に関してはこれから成長するのだろうと感じていた。

だが、同期の友人である磯部美玖は、足立を「うーん。あれは腹に一物あるタイプ」と言っていた。

それが、どういう意味なのか舟にはわからない。ただ、仕事を頑張ってもらえたらいい



いと思っっている。

腹に一物あるうとなかろうと、仕事に支障が出なければ問題ないのだ。

舟は足立から目を離し、手渡された書類に目を通し始める。それは同僚の企画の販促スケジュールだった。

読んでみると、ボツになった自分の企画が頭をよぎる。

舟は焦燥感しょうそうかんに駆られた。

どうして自分はこのな余裕がないのだろう。必死になりすぎているのがかえってよくないのではないかと、ため息をつきそうになる。

舟は軽く首を横に振って気持ち切り替えた。

今日は金曜日だ。来週に仕事を残したくはない。

頼まれていた仕事を急いで片付けたが、予想以上に時間がかかり、帰るのが遅くなっってしまった。

もう数人しか残っていないフロアで「お疲れさまでした」と声をかけ、オフィスを出る。

ようやく終わったと肩をぐるぐると回しながら外の空気を吸い込むと、雨の匂いがした。

本格的に降り出す前には帰ろう。

梅雨入りをしてから一週間ほどたっている。

毎日の雨に多少うんざりしつつも、舟は雨が嫌いではなかった。

周りの空気がしっとりすると、心も潤うるおう。

舟は天気を気にしながら、足早に駅に向かった。

夜の七時を過ぎた街は暗い。

電車に乗り込み揺れる視界で、流れるビルの光をぼんやりと眺める。いつも見ている街並みなのに、今日は知らない場所のように感じた。

思った以上に自分は落ち込んでいようだ。

自宅の最寄り駅に電車が着く。

舟は駅前のスーパーでお酒とおつまみを買った。今日は疲れたので、夕飯は簡単なもので済ませてしまおう。

一人暮らしの食事の支度は面倒くさい。

自分のためだけだと思いと料理をする気になれないのだ。

実家にいた頃は、妹と弟の分もよく食事を作っていた。

舟の両親は仕事人間なので、あまり家にはいない。妹と弟いわく、家の味は姉——舟の味だそうだ。

そんなふうに使われているのは誇らしいが、喜んでくれる人がいない時はやる気が出

ない。

自分一人の今は、納豆ご飯やカップラーメンで充分だ。足りない野菜はコンビニのサラダで補<sup>きこ</sup>っている。

舟はスーパーの袋をさげて、レンタルショップに寄り映画を物色する。

こんな気分の日には泣ける話を見てすっきりするか、敵をバッサバッサと斬りまくる話を見たい。頭を使う小難しいものは、別の日にしよう。

新作を四枚借りて、駅から徒歩十分の自宅マンションに戻った。

ここが舟のお城だ。

社会人になると同時に実家を出て以来、ずっと住んでいる。治安も良く、近くに遅くまでやっているお店がたくさんあるところが気に入っていた。

駅からの道も人通りが絶えないので、女性一人で暮らしていても安心だ。

ただ、最近、痴漢被害があったという噂があった。少し警戒する必要があるかもしれない。

舟はマンションのエントランスを通り、自分の部屋の郵便受けを確認する。必要な手紙といらぬチラシとを分け、いらぬほうを設置されているゴミ箱に入れると、エレベーターに向かった。

郵便受けには手紙と一緒にマンションからのお知らせが入っていた。

エレベーターを待ちながらそれに目を通す。

「災害時の避難訓練かあ。予定がなかったら参加しようかな。後は、下着泥棒と空き巣に注意——」

このマンションで下着を盗まれたことも空き巣に入られたこともない。油断は禁物だが、それほど神経質になる必要があるとは思えなかった。

「……あれ？」

なかなか到着しないエレベーターを訝<sup>いぶか</sup>しんで顔を上げた舟は、押したはずのエレベーターのボタンが光っていないことに気がついた。

もう一度押してみたが、反応はない。

「え、なんで？ 嘘——」

多少イラつきながら何度かボタンを押すものの、やはり無反応。

舟は盛大に息を吐いて、外階段を上ることに決めた。

舟の部屋は三階にある。

たかだが三階と思うも、普段階段を使わない舟にとってはつらい。

どうにか最後の階段に差しかかり、スーパーの袋を持ち直した瞬間、バチンと音がしてマンションの電気が消えた。

「なっ!? きゃっ!」

辺り一面の暗闇に混乱した舟は、階段を踏み外した。心臓が強い力で握り潰されたかのように痛み、「ヤバイ」と脳内に警報が鳴り響く。想像した未来は後方への転倒。当たり所が悪ければ、死ぬ可能性がある。どこかに掴まろうと手を伸ばしたが、その手は空を掴むばかりだ。

舟は目を強く瞑<sup>つむ</sup>って、衝撃に備えた。

——だが予想とは違う何かに背中がぶつかる。

バサバサと鞆が階段を転がり落ち、お酒がカンツと高い音を立てて転がっていった。舟は荒い息を吐きながら、自分の身に何が起こったのか考える。まず後ろに感じる温かいものの正体を確かめなければ。

「いつ、た。君、大丈夫だった？」

振り返るよりも先に聞こえてきたのは、男性の声だった。

彼が倒れてきた舟の下敷きになってくれたようだ。

確認するために首をひねって見下ろすものの、慣れない暗闇に相手の顔はまったくわからない。

ただ、彼の声はどこかで聞いたことがある気がした。

こんな場所にいるのだ。マンシヨンの住人だろう。すれ違ったことがあるのかもしれない。

舟は男性に、「はい」と小さく答え、急いで上半身を起こした。

まだ辺りには一切光は見当たらない。

マンシヨンだけではなくこの地域一帯が停電しているようだ。

「あの、ありがとうございます」

「いやいや、俺も偶然通りかかったただけなので。助けられてよかった」

すぐ間近で男性が小さく笑う。

舟は自分の心臓がドキドキと高鳴っているのが、階段から落ちたせいなのか、それとも別の意味を持つのかわからなかった。

「っと、転がったのを拾わないといけないな」

男性が立ち上がり、舟の腕を引っ張って立たせてくれた。

スマホの懐中電灯を点ける。その眩<sup>まぶ</sup>しさに目が痛くなってしまう、舟はぐつと目を閉じた。

暗闇の中の強い光は目につらい。

ぼろぼろと涙が零れてくるのを、化粧が落ちるのも構わず舟はごしごしと拭いた。その間に、舟の荷物を拾い終えた男性が懐中電灯を消してしまふ。

舟は結局、彼の顔を確認できなかった。

「はい、これ」

「ありがとうございます。すみません」  
勘で、手を出す。

彼のほうは見えているかのようには、きちんと舟の手を握り荷物を渡してくれた。触れた彼の手の甲に、傷なのか、ぼこぼことした凹凸があることに気づく。

怪我をさせてしまったのだらうか。心配になる。

舟が荷物を受け取り終えると、男性はすぐに手を離れた。

「一応全部拾ったつもりだけど、拾い損ねがあるかもしれないから、明るくなったら一度確認したほうがいい」

「はい、そうします。ありがとうございます。あの……どこかお怪我をさせてしまったでしょうか？ 本当にすいません」

相手には見えないかもしれないが、舟は何度も頭を下げてお礼とお詫びを告げた。

「いや、俺は大丈夫。それよりも階段上れるかな？」

舟は辺りを見回した。やはりほとんど何も見えない。

「……正直、厳しいです」

「そっか。俺はしょっちゅう階段使うから慣れてるけど……悪いけど触るね」

男性はそう断ると舟の手を取り、腰に腕を回した。

ぐっと近づいた距離に息が詰まる。

見えない分、彼の体温と香りを敏感に感じてしまう。彼から香るスパイシーで甘い匂いに頭がくらくらした。

舟は誘導されるままに一段ずつ階段を上る。暗闇の中で、彼の体温だけが心の拠り所だった。

なんとか階段を上りきり、三階の踊り場まで辿りついて足を止める。遠くかすかに街の明かりと星が見えた。

「わあ」

「この辺りだと、普段は街明かりで星なんか見られないから、なんとなく得した気分になるね」

男性が呟く。

「得……ですか？」

「そう。こういう景色を見ると、忙しなく焦って生きている心が少し落ち着くからさ。

本来なら山を登ったり、遠くに出かけたりしないと見られないだろう」

そういうえば、ここ一年ほど空を見上げるなんてしていないことに舟は気づいた。

いつもいつも下を向きながら、日々を必死に走っていた気がする。

男性の言葉に、舟は久しぶりに呼吸をした気になった。

「あの……。私、この階なので」

どうしても彼の顔を確認したくて隣を見るも、やはりこの暗さだとはつきりとはわからない。

「そう？　じゃあ、見知らぬ男に部屋がわかるのは嫌だろうし、俺は一応下におりるから、部屋に戻って」

「え、そんなことありませんよ！　助けてくれたお礼がしたいので、お名前を教えてください」

慌てて頼むと、彼はしばらく沈黙した。

「……俺、小さい頃ヒーローに憧れてたんだ」

突然の昔話に舟は戸惑う。

今の会話の流れでなぜ小さい頃の話が出るのだろうか。

「ヒーローってさ、自分の正体を明かさないだろ」

「確かに、そういうイメージはあります」

「だから、俺の正体は秘密」

顔は見えないけれど、男性は笑っているように思えた。

「どうしても、駄目ですか？　私は貴方の顔がきちんと見える時にお礼を言いたいです。名前が無理なら、部屋番号だけでも教えていただけませんか？」

部屋の場所がわかれば、後日お礼を渡すことができる。そこから名前を調べすることも

できると思った。

けれど彼はそんな舟の考えなどお見通しのようなのだ。

「ありがとう。気持ちだけ受け取っておくよ。本当に、気にしないで。それに、もう少し星も見たいから」

舟は、これ以上は相手に失礼だと判断した。

細やかに気を遣ってくれる、こんな人が世の中にはいるのかと、温かい気持ちになる。最後にもう一度お礼を告げて、部屋に向かった。

足元をスマホで照らして歩き、そつと後ろを振り返る。

今この光を彼に向ければ顔を確かめることはできる。けれど、彼の気持ちを無下にするようで躊躇ためらわれた。

結局、男性の顔を見ないまま自分の部屋のドアを開け、中に入る。電気のスイッチを手探りでつけたが、予想通り明るくはならなかった。

舟はため息をつき、スマホの懐中電灯を頼りに着替えをすませる。

化粧を落とすし、食事をとったものの、それでもまだ電気は復旧しなかった。これでは、せっかく借りてきた映画が観られない。

仕方なくベッドに潜り、スマホを弄いじった。

停電の理由を調べてみたが、今のところよくわからない。

ふと、先ほど助けてくれた男性のことを思い出した。彼は今、何をしているのだろう。どうにかしてもう一度会いたい。

なんとか探せないだろうかと思案するが、彼について知っていることは、声と香り、おぼろげな体格、そして手の甲の凹凸おぼろげだけ。

何もいい案は浮かばないまま、眠気に負けて意識を手放した。

## 第二章 涼風りようふう

カーテンの隙間から東雲色しのめいの光がさし込む。

停電の日の翌朝、舟はぼさぼさの頭を手ぐしで整えながら身体を起こした。ぐっと伸びをすると、あくびが出る。

ベッドから出ようと床に足をつけた瞬間、痛みが走った。

「いっ……っ……」

足だけではなく身体全体に痛みを感じる。

昨夜は気持ちなまが昂たかっていて気づかなかったが、階段から落ちた際に足をひねり、どこ

かに身体を打ちつけてしまっていたようだ。

「最悪。ってことは、やっぱりあの人も怪我させちゃったのかもなあ」

本当に申し訳ないことをしてしまった。やはり謝罪とお礼をしたい。

三階近くまで上がってきていたので、同じ階か上の階の人だろう。

ただ、さすがに一部屋ずつ訪問するわけにはいかない。とりあえず来週の金曜日の同じ時間に、エントランスで待ってみよう。

顔は見られなかったが、だいたいの体格なら覚えている。

その時間に帰宅する人なら、また会えるかもしれない。

舟は痛む足に体重をかけないように歩き、引き出しから湿布しつぷを取り出した。痛めた場所ところに貼はりつけて、息をつく。

もう電気は点つくだろうかと、テレビの電源を入れた。

果たして無事に点ついたテレビから、ニュースキャスターの声が聞こえる。

きちんと充電されていたスマホで、昨日何が起こったのかを調べた。

どうやら、変電所のトラブルで地域一帯が停電したらしい。詳細は現在も調査中となっている。

舟は顔を洗い、軽食を作った。

足を痛めたばかりなので、今日は一日家で大人しくしていよう。

窓を開けて部屋に風を通すと、隣の犬がきゃんきゃんと鳴いているのが聞こえた。「今日も元氣だなあ」

このマンションはペット可なので、窓を開けるとたいい動物の鳴き声がする。といつても、うるさいというほどではない。

舟も動物が好きなので、いつか動物と一緒に暮らせたらと思ってここを選んだのだ。ただ独身者がペットを飼い始めたら結婚ができなくなると友人たちに口酸っぱく言われていることもあり、軽率に飼うつもりはない。

生き物を飼うのは簡単なことではないし、お金もかかる。今のところSNSの写真や動画で我慢している。

右隣の部屋で飼われている犬の姿を思い浮かべながら、ソファアに戻る。

季節は夏にはまだ早い時期で、気温は暑すぎることもなく涼しすぎることもない。

舟はレンタルショップの袋から昨日借りてきた四枚のDVDを取り出して、何から観ようかと考えた。

借りてきたのは、泣ける恋愛ものとアクションものが二本ずつ。

まずは恋愛ものと思いつき泣こうと決め、映画をデッキにセットした。

結局この日は一日、映画を観て過ごした。

日が暮れる頃、舟は満足してソファアに寄りかかる。けれど、すぐに恋の一つもできないのはこんな生活をしているからなのじゃないか、という不安が頭をもたげてきた。

頭の中で、いつもの数人の自分が会話を始める。

『外に出ないヤツが恋人を作れると思うなよ』

『自分で出合いの場を潰しているくせに、恋人ができないと嘆くのは、おかしい話だ』

『努力をしない人間に、恋が舞い込んでくるわけがない』

『そもそも恋人を作らなくなつて、仕事があるから問題ないと言っていないかった？ 作

りたいなんて本気なのかしら？ 何がしたいのかわけがわからないわ』

舟はぼふっとクッションに顔を埋めて、うめき声を上げた。

結婚をしなくても幸せになれることは理解している。

孤独死は怖いが、老後のためのお金を貯めて介護付きマンションにでも入居すればいいのだ。

ただ、舟にはまだそこまで達観することはできなかった。

一人でも大丈夫という気持ちと一人でいたくないという気持ちがせめぎ合う。

たとえ、愛しい人でも所詮は他人同士、生きてきた過程が違う。時には相手に合わせる必要がある。

それが面倒くさいと思ってしまふあたり、自分は終わっている。それに、一人でいるのが嫌だから結婚したいのか、好きな人と一緒に生きていくために結婚したいのかがわかっていない。

これでは仮に恋人ができたとしても、相手に失礼だ。二十代前半はそんなこと考えなくてもよかったのに、三十に近づくにつれて悩みが増えていく。

クッションを抱きしめながらうんとうなっていると、脳内会議がまた始まった。

『ワタシは老後が心配だから結婚したいわけ？』

『いい人がいれば……って、自分の老後を支えてくれる人ってこと？』

『というよりは、周りが結婚しているのに自分は決まった相手すらおらず、他の人より劣っているように思えるのが原因な気がする』

『それだ！』

「それだ、じゃないわ！」

脳内の自分のあんまりな結論に、全力で突っ込みを入れてしまった。

本当に疲れているらしい。昨日は早く寝たというのに。

しかも、脳内の自分自身にダメージをくらわされるといのがなんとも言えない。

自分で自分が嫌になる。

そもそも脳内会議などせずとも、答えなどどうに出ている。

一人でいると、周りよりも女性としての魅力がないと指摘されているみたいで、苦しいのだ。

元気な時ならば、別にそれがどうしたと開き直れるし、女性の魅力なんてものは一つではないこともわかっている。

結局のところ、誰かに認めてほしいだけなのだ。自分の嫌なところばかり考えないで済むように。

「分析すればするほど、自己嫌悪に陥っていくわ」

仕事に余裕がないのも、こんなふうに気持ちが悪くなってしまっていることが原因だろう。

「……やーめた。自分で自分を追い詰めてたら世話ないわ」

頭をふるふると振って、昨夜の男性のことを考える。

不安な気持ちでいる時に助けられたせいとか、彼のことは純粋に素敵だと思えた。まるでずっと昔からの知り合いだったような不思議な感覚——

「それにあの声、どこかで聞いたことがある気がするのよねえ」

舟は身体を横に揺らしながら思考したが、思い当たる人物は出てこなかった。

気になってしまった人だからこそ誰かに似ている、知っているかもしれない、と感じ



るのだろうか。

もしくは、マンシヨンの廊下かエントランスで声を聞いたことがあるのかもしれない。同じマンシヨンに住んでいるのだから、彼とすれ違ったことくらいあるはずだ。

どうにかして彼の部屋がわからないかと考えていると、右隣の犬の声が入った。

ふと、左隣のことが気になる。

実は左隣の人とは、挨拶を交わしたことがない。

舟が引越してきた時は同い年ぐらいの女性が住んでいたのだが、つい最近、彼氏と結婚することになったとかで引越していったのだ。

同じマンシヨンに住む嗜好きのおばさまによると、その後に入ったのは独身の男性だという。彼と舟とは生活の時間帯が合わないのか、その人とは会ったことがなかった。

朝はいつ出かけているのか知らないが、夜は舟が帰ってきた後、ドアの開閉音とする。土日も外に出ていることが多いようだ。

窓を開けていると、時々「リン」と女性の名前を呼ぶ男性の甘い声が聞こえるので、彼女と同棲をしているか、頻繁に出入りさせているのかもしれないなかった。

もっとも、このマンシオンはペット可ということもあってそこそこ防音がしっかりしているため、それほどはっきりとわかるわけではない。

なんとなくその声が昨夜の男性に似ている気がしてきた。そんな自分に苦笑する。

ほうつと座っているのがよくないのかもしれない。

そう思った舟は食事の準備を始める。

家でただらだと過ごし身体をまったく動かしていないのに、食事をするというのは問題だ。

今日は安静にしなければいけない理由があったからともかく、ここ最近はずっとこんな感じで過ごしている。

「本当にどうにかしなくちゃ、このままだと駄目人間になる」  
舟はため息をついた。

\* \* \*

そして月曜日。

結局日曜日と同じように過ごしてしまったことを反省しながら、舟はいつもの時間に会社した。

身体の痛みはだいぶ和らいでいる。

自分のデスクで同僚の企画資料のためにデータを整理しつつも、自身の企画について考えた。

どんな人にも使えるようにシンプルで機能性が高いものをと考えていたが、確かに面白みには欠ける。

なんだか自分の生き方そのもののような気がして、苦笑いが漏れた。では、どうすればいいのだろうか。

そんなことを考えながら舟は一日を過ごし、定時を少し過ぎた頃に退社して、真っ直ぐマンションの管理室へ向かった。

まだ、停電の時に拾い忘れたものがなかったのか確認していなかったのだ。

外階段は毎日管理人が掃除をしてくれている。何か拾い忘れがあつたならば、保管してくれているに違いない。

舟は管理人に事情を説明して、金曜日以降の落とし物を見せてもらった。

覗いた箱の中に、見知ったものがある。

それは以前会社の慰安旅行で使ったホテルの売店で売っていた、ゆるキャラのキーホルダーだった。

舟は思い出にとそれを買ったので、一瞬自分のものかと思つて手に取る。だが、よく考えると、そのキーホルダーを外に持ち出したことがない。

偶然、同じものを買った人がいたようだ。

一通り落とし物を確認したものの、自分の物はない。舟はお礼を言つて管理人室を

出た。

エントランスを通り過ぎたところで、声をかけられる。

「三階のお嬢さん、今日は早いのねえ」

「こんばんは」

声をかけてきたのは、このマンションに住んで長いという噂好きのおばさまだ。世話好きな彼女は、舟が引越してきた当初もこの辺りのことをいろいろと教えてくれた。

「ねえねえ、最近下着泥棒が多いらしいんだけど、知ってる？」

「そういうえば、郵便受けに注意喚起の紙が入っていましたね」

「そうそう、それがね！ 五軒先のマンションに出たらしいのよお。お嬢さんも一人暮らしてしょう？ 下着とか外に出さないように気をつけないと駄目よー」

「ありがとうございます。そうだったものは外に出してないので大丈夫だと思いますが、気をつけますね。あの……、すみませんが、そろそろ」

「あらやだ、ごめんなさい。おばちゃん、話すの大好きだから。それにしても金曜日の停電は大変だったわよねえ——」

——結局、その後三十分もおばさまに捕まってしまった。ようやく部屋に戻り、舟はくたたりと首を下げる。

かなり疲れたものの、おばさまの話は重要だった。

下着泥棒が五軒先のマンションにも出たのか。すでに警察に相談していて巡回してもらっているらしいが、なかなか捕まらないようだ。

下着は部屋干ししかしていないし、舟の部屋は三階なので大丈夫だと思いが、気味は悪い。

こんな時、恋人がいれば安心するのにとまた思ってしまった、そんなことのためだけに恋愛をするのかと反省する。

このところ、そればかり考えている気がする。

脳内会議が始まらないうちに、舟は着替えと食事を済ませた。

就寝するには、まだ時間が早い。

渡すあてもないのに、停電の時に助けてくれた男性へのお礼の品をネットで調べることにした。いろいろなサイトを覗いてみるものの、どうにもしつくりくるものがない。

「んー……、決められない」

画面を見すぎて目がチカチカしてきたので、パソコンを閉じる。友人に相談してみようかと思いつき、眠りについた。

\* \* \*

そして週の半ばの水曜の夜。

舟は一番仲のいい友人である同期の美玖を、二人でよく行くカフェダイニングに誘った。

この店は、夜遅くまでやっている上、座席数が多く予約を取らなくてもすぐに入れるので重宝している。

音楽とアートを楽しむことをコンセプトにしている店内には、ゆったりとしたアンティークなレザーソファが置かれ、壁の本棚に英文の本が飾られている。

舟は来たことがないが、休日にはジャズの演奏会が開催されることもあるらしい。平日の今夜はゆったりとした音楽が流れていた。

テーブルの上に、『丸ごとトマトとカマンベールチーズのアヒージョ』と『タコとパクチーのカルパッチョ』、『シーザーサラダ』に『お店一押しラムチョップ』が並ぶ。

舟はアメリカンレモネード、美玖はシャンディガフで乾杯した。

「今日もお疲れさまー」

「まだ週の半ばなのがうれしい！ 気分は金曜日！」

「わかる」

美玖との会話は気兼ねがなくて気持ちがいい。

舟は彼女の言葉に頷きつつ、いつものようにとりとめもない話を聞く。

内容は会社の愚痴と美玖の彼氏の話だ。

最近付き合ひ始めたというその恋人が誰なのか、彼女はなかなか教えてくれない。自分に紹介できないほど怪しい人物なのか、ひよっとして不倫でもしてるのかと心配しているのだが、無理に聞き出すのも気が引けた。

舟は黙って聞き役に徹している。

恋愛経験が少ない舟には話すことが何も無いのだ。

しかし今日は違う。こうして彼女を食事に誘ったのは、相談にのってもらいたいことがあるからだった。

「ねえ、美玖。知らない人からのお礼って気持ち悪いかな？」

「唐突だねえ。なんのお礼かがわからないのに、なんとも答えられないよ」

「この間、うちの地域で大規模な停電があったの」

「あー、あの変電所のトラブル？」

舟は、美玖にあの日あった出来事を説明した。

彼が素敵な人だったということ差し置いても、何かお礼をしたいと思っていることを伝え、何が適当なのか聞いてみる。

「なるほどなあ。んー、残らないお菓子とかが一番かな」

「……やっぱりそうだよねえ」

「でも、舟はこの先、その人と知り合いになりたいんですよ。それならあっても困らない、普段使うものかな。いずれにせよ高いものは駄目。二千円以内が妥当かしら」

彼女の言葉に頷き、舟は忘れないように頭の中に付箋ふせんを貼った。

明後日、会社帰りに買い物しよう。

その後もゆったりと食事をし、美玖と別れたのは日付を越える時間帯だった。誰かに話をしたおかげか気持ちがりフレッシュふせんされている。

舟は、話を聞きアドバイスをしてくれた美玖に感謝した。

そして、待ちに待った金曜日。

定時で会社を飛び出すように退社した舟は、デパートに向かった。

今日はエントランスであの男性を待つつもりだ。

月曜日から毎日探してみてもよかったのだが、彼が毎日あの時間帯に帰ってくるかはわからない。

それなら停電の日と同じ曜日のほうが確率が高いと踏んだ。

舟はデパートの中をぐるぐると周り、会社で使えそうなシックな蓋付きのマグカップを購入する。割れにくい素材でできたそれは、男性が使うのには丁度よさそうだ。

けれど、ラッピングをしてもらうにつれて、舟の心には不安が募ってきた。

本当にこれで正解なのだろうか。相手の男性からすれば、偶々通りがかりに手を貸したただけだ。名乗ることすらしなかった。それなのにわざわざ探し出してまでお礼を渡されたら、重たいと感ずるのではないか。

もう購入してしまったのに、また迷い出している。

さすがに返品するのは躊躇われ、舟は彼に嫌な顔をされたら自分が使おうと決めた。もしくはお礼を渡す前に仲よくなって、その後には渡してもいい。

とりあえず、最初はお菓子のほうが無難だ。

そう思い直し、改めて地下のお菓子売り場へ向かう。

散々悩んだ結果、お気に入りのお店で煎餅を購入した。

食べたことがないものをあの人にあげたくはない。自分が美味しいと思うものを選んで。

思っていたよりもデパートで時間を使ってしまう、慌ててマンションへ帰る。

舟はエントランスで男性を待った。

何度も鏡を取り出して前髪を整えてしまうあたり、バレンタインチョコを渡す女子高生のような気分だ。なんだかんだといつて、相当浮かれている。

舟は緊張しながらしばらくそこに佇んでいた。

ところが夜の十一時を過ぎても、あの男性らしき人は現れない。顔こそ見なかったが、体格と雰囲気で行くと思っていたのに。

これ以上待つとマンションの他の住人に不審がられてしまいそうなので、舟は諦めて部屋に戻った。

また来週待ってみよう。

毎日探したい気もあるが、それをすると管理人へ苦情が入る可能性がある。

煎餅の賞味期限まではそれなりにあるし、今は偶然にかけるしかない。

ため息をつきながら、舟はお風呂に入った。

髪の毛を乾かした後、ビールとおつまみを持ってベランダに出る。

夏のじめじめとした暑さはあるものの、吹く風はさわやかで気持ちがいい。ビールを飲みながら夜景を見るのが、お気に入りの過ごし方だ。

舟の部屋からとりたてて素晴らしい景色が眺められるというわけではないのだが、街の明かりを見ているとなんとなく安心する。

世界は自分一人ではないと思えるから。

ビールに口をつけた時、隣の窓がガラリと開く音がした。視線を向けると、男性が立っている。

その顔は翳ってよく見えず、舟は一瞬、停電の日に助けてくれたあの男性なのでは、

と胸を高鳴らせた。

けれどそこにいたのは、舟がよく知っている男性だ。

「え？」

「あれ、戸松？」

なんと、隣のベランダにいたのは、苦手な同期の西平だった。

彼はへらへらと笑いながら、舟に手を振ってくる。

「もしかして隣に住んでるのって戸松なの？ わー、マジカー！ こんな偶然あるんだな！」

何が嬉しいのか、西平はいそいそと近寄りながら笑顔で舟に話しかけてきた。

「……ああ、そっか。私は幻覚を見てるんだ。まさか隣に西平が住んでるわけない。相当疲れてるのかもしれない」

「いやいや！ なんて俺が隣にいるっていうだけで現実逃避するんだよ」

思わず顔を手で覆おおつてから、舟はもう一度隣の男性を見る。

確かに西平だ。

西平以外誰でもないぐらいに西平だ。残念なほどに西平だった。

舟はどう対応しようか、一瞬悩んだ。だが、予想外すぎる出来事に頭がこんがらがり、考えるのが面倒くさくなった。

手に持っていたビールを一気に呷あおり、勢いよく西平を見る。彼は驚いたような表情で舟を凝視していた。

「おやすみなさい！」

叫ぶように言い放ち、さっさと部屋に戻る。

「え……、あ、おやすみ……」

背中から呆然とした西平の声が聞こえた。

結局舟は、隣の住人が西平だという事実をなかつたことにし、その日は寝てしまった。

次の日、目覚ましのアラームと共に起き上がり、舟は髪の毛をかきむしった。

寝て起きたれば昨日の出来事が夢にならないかと考えていたが、そんなことはなかつた。昨晩のベランダでの会話はきっちり覚えている。

「なんで隣に西平がいるのよ！」

朝から最悪な気分だ。

たまたま空いた隣の部屋に嫌いな同期が引越してくるなど、こんな偶然あっていいのだろうか。

しばらくベッドの上でごろごろと転がって暴れると、少しすっきりしてきた。

隣が西平なのはもう仕方がない。昨日まで一度も顔を合わせなかつたのだから、今後

も会う機会は多くはないはずだ。

そう、思っていたのに――

「……何？」

「醤油、貸してほしくてさー」

その日の夜、西平が舟を訪ねてきた。

玄関の扉を開けた途端、目の前で笑っていた西平。その横つ面を殴ってやりたい衝動に駆られながら、舟は冷蔵庫から醤油を取り出して手渡す。

この馴れ馴れしさはなんなのだ。

「ありがとう！　すぐ返すよ。刺身買ってきたのはいいんだけど、付属の醤油だけじゃ足りなくてさ。うち今、切らしてて」

「……いいわよ。醤油ぐらい」

「なんか、隣同士のあつて感じだなー」

西平は手を振って一度部屋に戻っていく。そして数分後に醤油を返しにきた。なぜかお礼だというクッキーを持って。

「これ、昨日一緒に食事した人からの土産。美味しいって有名なんだけど、俺そんなに食わないからあげる。じゃ、ありがとうねー」

そう言うと、人懐っこい笑みを浮かべて帰っていった。

舟は冷蔵庫に醤油をしまい、貰ったクッキーを口の中に放り込む。

「……美味しい」

なんだか無意味に苛立っている。コーヒーでも飲んで一息つきたい。

気づけばクッキーは全てお腹の中に収まっていた。思っていた以上に舟の好みの味で、また食べたいと思うほどだ。

袋を見てみたが、西平が元の包装から移したのか、どこのお店のものなのかいまいちわからなかった。

直接聞けばいいのはわかってはいるけれど、散々嫌な態度をとって置いてこんな時だけ自分から話しかけるのは調子がよすぎる気がする。

それに有名なクッキーだと言っていたから、お店がわかったところで手に入りにくいかもしれない。舟はいろいろ理由をつけて、我慢することにした。

次の日も、コンビニの帰り道に西平と遭遇した。

「あ、戸松だ！」

大きな鞆を肩に引っかけた彼は、舟の姿を見ると笑顔で駆けてきて隣に並ぶ。

「コンビニ帰り？　俺は草野球帰り」

無視をしようと思ったが、予想しなかった言葉に反応してしまった。

「草野球？ 西平、草野球なんかやってるの？」  
 「うん。時々だけど、メンバー足りないと呼び出されるんだよね。んで、だいたいはその後飲み会なんだけど、今日はそっちには参加しないで帰ってきたんだー」  
 「ふうん」

正直舟にはどうでもいい内容なので、適当に頷く。  
 しかし、なぜわざわざ隣を歩くのだ。

帰る場所が同じなので道が一緒なのは仕方がないが、もう少し離れて歩いてもいいのに。

結局、西平は草野球の話をし続け、舟と一緒にエレベーターに乗った。エレベーターが動き出すと昨日のクッキーの感想を聞かれる。

「クッキー、美味しかった？」

「えっ……、うん。美味しかった……」

「なら、まだ残ってるからあげる」

「いや、いいよ。だって、それ西平が貰ったものでしょう？ 私が食べちゃうわけにはいかないよ」

「俺は一つで充分だし、美味しいって言ってくれる人が食べたほうがいいよ」

結局、クッキーの魅力に抗うことができず、西平に押し切られた舟は、クッキーを箱

ごと受け取ってしまう。

舟は夕食後に、箱に描かれたロゴを頼りにして検索をかけてみた。

するとすぐに、店がヒットする。クッキーが一箱五千円もする人気商品だと判明した。

「ひいつ、そりゃ美味しいわ！」

こんなものをくれるなんて、西平は甘いものが苦手なのだろうか。

そうだとしても、気前がいい。

現金なことに、舟は彼がそんなに嫌な奴ではないのかもしれないと思いはじめた。

「それにしても、彼女も甘いもの苦手なのかしら？」

ちよつとしたモヤモヤは残ったものの、それは考えても仕方がないことだ。

舟は渡せずにいる煎餅せんぺいにちらっと視線をやる。自分が買った煎餅せんぺいもあの男性に喜んでもらえたらしいなと思った。

それからというものの、今まで一度も会ったことがなかったのが嘘のように、不思議と西平と出社時間が重なるようになった。

わざわざ避けるのも、それはそれで大人げないような気がして、同じ車両に乗る。

「一本早くしただけで、満員電車も少し楽になるなー」

「西平、近い」

「えー、満員だからしょうがない!？」



毎朝、舟が苦しくないようにと西平はドアに両手をつけて場所を確保してくれる。そうすると彼に囲われているような体勢になってしまつて、気まずいというより恥ずかしい。

その日、ガコンツと電車が揺れて、西平と舟の身体が密着した。彼からは、あの停電の男性と同じ香りがする。

同じ香水を使っているのだろうか。だとしたら、なんとという香水なのか聞いてみたいけれど、どう切り出せばいいのか、舟にはわからなかった。

そうこうしているうちに電車は会社がある駅に着く。

当然、電車を降りた後も西平は舟の隣を歩いた。

正直、二人でいるところを会社の人に見られたくない。

どうやって差しさわりがないように逃げようか考えているのだが、いつもうまくいかないのだ。

「あ、前方に美玖発見！ 先行くね！」

今日は運のいいことに、前を歩いている友人を発見し、迷わず走り寄つた。

朝だけではなく、帰る時間も西平と度々重なっている。

そのせいか、社内でも偶然会つと、彼は必ず舟に話しかけてくるようになった。

今まではお互い挨拶を交わすぐらいの付き合いだったというのに、隣に住んでいると

いうだけで、ここまで態度が変わるものなのだろうか。

それに西平には彼女がいる。こんなにも自分に親しげにしていると彼女が知ったら、気分がよくないはずだ。

もしかして別れたのかもしれないとも思ったが、ペランダに出ると、時々「リン」と呼ぶ声や「お前は可愛いなー」と言っている西平の声を耳にする。

嫌な奴ではないかもしれないが、軽薄な男には違いない。他人事ながらイライラしてしまう。

元々彼のが苦手だったこともあり、距離が近くなるにつれ余計にざわざわと心が波立ち、苛立いらだつた。

特に腹が立つのは、彼女がいるのに自分を食事に誘ってくることだ。彼女がいると気づかれなければならないと思つているのか。

自分はお手軽に遊ぶようなタイプだと見られているのかとも考えてしまい、暴れたいなる。

そんなふうに西平に振り回され、気づけば彼が隣の住人だと知つてから半月ほどたつていた。

今日は金曜日。舟はあの後も金曜日はエントランスに立っている。

停電の男性らしき人がいないか、ずっと探していた。特に意味もなくコンビ二に向

かつてみたり、郵便受けを開けに行ったりしてみるのが、彼らしい人物には一度も出会えないでいる。

「なんだか本当に彼が存在していたのか疑わしい気持ちにすらなってきた。」

「あれは寂しさのあまり見た幻想だったのだろうか。」

「あの香りもぬくもりもこんなに覚えているのに？」

「待ち始めて一時間ほどたった頃、エントランスに入ってくる男性の影が目に入る。それがなんとなくあの男性に似ている気がして、舟の心臓が高鳴った。」

「前髪を手で直し、手渡す予定の紙袋を持ち直す。」

「自動ドアが開き、現れた男性に声をかけようとした舟はそこで立ち止まった。影が誰なのかに気づいたからだ。」

「西平……」

「あれ？ 戸松だ。こんな時間にエントランスなんかでどうしたの？」

「別に……」

「まさか停電の男性と西平を見間違えるなんて思わなかった。そして、今日もまた会えなかったのかと意気消沈する。」

「戸松、元氣ない？」

「元氣、なくない」

「西平に顔を覗き込まれ、思わずぶいっと視線をそらした。」

「どっち!? というか帰らないの？」

「帰るわよ」

「促されるまま、エレベーターに乗り込んで舟は部屋に戻った。」

「やっぱり彼とは出会えなかった。西平には会ったというのに。」

「会いたい人には会えないのに、会いたくない人には会ってしまふ。」

「あの人、どうしてるんだろう」  
ベランダで夜景を眺めながら、舟は小さく呟いた。

\* \* \*

## 立ち読みサンプル はここまで

翌日の土曜日。

舟は盛大にため息をつきながら、カーテンを開けた。

「今日は快晴で、洗濯日和だ。」

「今日は買い物にも出かけたかったので、さっさと洗濯を済ませたい。」

「洗濯機を回している間に、パンの上に卵とピザ用チーズを載せ塩コショウを振ってオーブンに入れた。いつものずばら飯だ。」